



丹念な取材で美術界の闇を暴くノンフィクション映画『ダ・ヴィンチは誰に微笑む』



ミステリー小説さながら 美術界の闇を暴くノンフィクション

美術界に潜む闇と巨額の取り引きの実態を暴いた『ダ・ヴィンチは誰に微笑む』が11月26日から公開されます。レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の絵画とされる「サルバトール・ムンディ」の数奇な運命を関係者の証言で明らかにするドキュメンタリー映画。ノンフィクションでありながら、ミステリー小説さながらの謎めいた緊張感を醸し出す作品です。

<あらすじ>

2017年、レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の傑作とされる絵画「サルバトール・ムンディ」が美術品として史上最高額の510億円で落札された。購入者は誰か。真のダ・ヴィンチ作品だと証明されたのか。世界中の注目を集めるこの絵は、今なお謎に包まれている。

事の発端は2005年、ニューヨークの美術商の“第六感”から始まった。ダ・ヴィンチには“消えた絵”があり、それには救世主が描かれているという説があった。名も無き競売会社のカタログに掲載された絵を見て、もしかしたらと閃いた美術商が13万円で落札したのだ。

彼らはロンドンのナショナル・ギャラリーに接触し、専門家の鑑定を得たギャラリーは新たに発見されたダ・ヴィンチの作品として展示する。お墨付きをもらったこの絵に、思惑を抱えた人々が世界中から集まってきた。

©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV

投資目的の大財閥や手数料を騙し取ろうとする仲介人、大衆を利用して絵の価値を釣り上げるマーケティングマンと利用されるハリウッドスター、国際政治での暗躍が噂されるある国の王子…。一方で、「ダ・ヴィンチの弟子による作品だ」と断言する権威も現れる。そして遂に、510億円の出所が明かされるが、それはルーブル美術館を巻き込んだ新たな謎の始まりだった。

©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV

<見どころ>

名画に魅せられた関係者へのインタビューで事実を掘り起こす

100分の上映時間の間、本作がドキュメンタリーであることを何度も忘れそうになった。「事実より奇なり」を地でいくようなミステリーであり、ほどよい胡散臭さも手伝ってエンタテインメントとしても楽しめる作品だ。

ダ・ヴィンチ作とされる名画について、多くの関係者へのインタビューで真実を明らかにしようとする。美術商、学芸員、美術歴史家、美術専門記者、競売人、大財閥の弁護士、マーケティング…。果ては中東の某国の王子のアドバイザーという人まで登場する。

©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV

そこで語られるのは、隠れた名画の発見が美術界に及ぼす衝撃であり、専門家の見地からの真贋の追求であり、そしてこの名画を使って巨万の富を生み出そうとする企みである。立場によって関心事が異なるのは当然だが、隠れた名画の発見に高揚する様は共通している。

©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV

名画が触媒となって人の業が浮き彫りになっていく。数々のインタビュー取材を重ねて事実を明らかにし真実に迫っていくスリリングさとともに、名画に魅せられた関係者たちの人間臭さを感じさせるところが、この映画に厚みを持たせている。

「13万円」で落札した絵画が「510億円」に

本作で特筆されるのは、何とんでも知られざる美術作品の取引の裏側を暴いたところであろう。13万円で落札した絵が史上最高額の510億円に化けるまでの過程は、まさに美術品を使った錬金術である。

高額な絵画の取引では、購入したことを明らかにしたくない人々が存在する。本作でも購入者の信を得た代理人としてふるまいつつ、売主と購入者の間で複数の取引を設定し、巨額の差額をせしめる「仲買人」が登場する。

©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV

本人は悪びれるどころかインタビューに対し「絵画取引の慣行」と言っているのには驚いた。美術作品の取引の一般的な姿だとは思わないが、お金のにおいに群がる怪しげな人々の描写には、リアリティを感じた。

美術界の闇を暴いたこの意欲作に対し、活字メディアも賛辞を惜しまない。「ミステリー小説に匹敵するスリル!!」（ザ・エコノミスト）、「ハリウッドでは描けない、痛快なノンフィクション! 傑作!!」（Der Spiegel）、「ここまで赤裸々に暴くとは! アートの価値観が変わる一本」（The Times）、「まったく新しいドキュメンタリー。ダイナミック!」（The New York Times）、「ダ・ヴィンチの謎が判明した瞬間、震えが止まらない」（ル・モンド）…。

2017年の510億円の落札者は発表されなかった。そして2019年にパリのルーブル美術館がダ・ヴィンチ没後500年記念の展示会での出品を交渉するも、現在に至るまで絵画の所在ははっきりしていないという。

ダ・ヴィンチの隠された名画に関する驚きの事実の数々を、ぜひ映画館のスクリーンで確認していただきたい。

文：堀木三紀（映画ライター／日本映画ペンクラブ会員）

作品データ『ダ・ヴィンチは誰に微笑む』監督：アントワーン・ヴィトキーヌ 原題：The Savior For Sale／100分／フランス映画／カラー／ヴィスタ／5.1chデジタル／字幕翻訳：松岡葉子 ©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV 11/26(金) TOHOシネマズ
シャンテほか全国順次ロードショー公式サイト：<https://gaga.ne.jp/last-davinci>

©2021 Zadig Productions (c) Zadig Productions – FTV